

『維摩經玄疏』 訳注 (7)

菅野博史

本訳注は、『維摩經玄疏』 訳注(一) (『大倉山論集』40、1996.12、235-261)、
『維摩經玄疏』 訳注(二) (『大倉山論集』45、1999.3、297-316)、『維摩經玄
疏』 訳注(三) (『多田孝文名誉教授古稀記念論文集 東洋の慈悲と智慧』所収、
33-54、山喜房仏書林、2013.3)、『維摩經玄疏』 訳注(4) (『創価大学人文論集』
29、2017.3、33-72)、『維摩經玄疏』 訳注(5) (『創価大学人文論集』30、2018.3、
61-84)、『維摩經玄疏』 訳注(6) (『創価大学人文論集』31、2019.3、115-148) の
続編である。創価大学大学院の授業で、院生と『維摩經玄疏』を一緒に読んで
いる。参加者は、大津健一、藤村光一、泉健一、向江千絵、須藤優の五氏であ
る。なお、本稿の校正については、横溝靖彦修士のご協力を受けた。記して感
謝の意を表する。

参考までに、今回の範囲の科文を下に示す。『維摩經玄疏』 卷第四の冒頭か
ら545a29までである。全体的に説明すると、第一部「五重玄義の通釈」の後
の第二部「五重玄義の別釈」(524b 3)の第一章「釈名」(524b 3)は、第一節「別
名を釈す」(524b 4)、第二節「通名を釈す」(547b25)に分かれる。さらに、「別
名を釈す」は、第一項「維摩詰を釈す」(524b21)と第二項「所説の法を釈す」
(547a24)に分かれる。さらに、第一項「維摩詰を釈す」は、「1. 名義を翻釈す」
(524b25)、「2. 三觀もて解釈す」(524c29)、「3. 四教分別を明かす」(532b 5)、
「4. 淨名の本迹の義を辨ず」(545a29)に分かれる。今回の範囲は、「3. 四教
分別を明かす」のなかが七段に分かれる(四教の名を釈す、所詮を辨ず、四教
の位に約して淨無垢称の位を分別す、權実を明かす、觀心に約して四教を明

かす、諸経論を通ず、四教を用て此の経の文を釈す)の「権実を明かす」が終
わる箇所までである。

科文において、「項」の下の層については、算用数字を用いる。科文の名称
については、テキストの箇所によって若干の表現の相違が見られるので、適
宜処理する。科文の名称の後の()に、大正蔵卷第38の頁・段・行を挿入する。

翻訳部分に、大正蔵卷第38の頁・段を挿入する。

注のなかの引用典拠については、CBETAを利用する。ただし、漢字は常用
字体を用い、句読点は改める。『大日本統蔵経』については、『新纂大日本統蔵
経』を使用し、略号をXとする。

『維摩経玄疏』科文

『維摩経玄疏』卷第四

- 3.34 円教に位を明かすに約して浄無垢称の義を釈す (540b13)
- 3.341 別・円の両教に位を明かすこと異なるを簡ぶ (540b23)
- 3.342 正しく円教に位を辨ずるを明かす (540c6)
- 3.3421 十信 (540c23)
- 3.3422 十住 (541a7)
- 3.34221 略して初発心住を釈す (541a8)
- 3.34222 類して九住を釈す (541b12)
- 3.3423 十行 (541b19)
- 3.3424 十廻向 (541b23)
- 3.3425 十地 (541b26)
- 3.3426 等覺地 (541c1)
- 3.3427 妙覺地 (541c4)
- 3.343 円教の位に約して、浄無垢称の義を釈す (542a10)
- 3.35 五味の譬に約して四教の位を顕わす (542a23)
- 3.4 権実を明かす (542b17)

- 3.41 略して権実を明かす (542b18)
- 3.411 一切は非権非実なるを明かす (542b24)
- 3.412 一切は皆な権なるを明かす (542b27)
- 3.413 一切は皆な実なるを明かす (542c1)
- 3.414 一切は有権有実なるを明かす (542c4)
- 3.42 位を格るを明かす (542c14)
- 3.421 三蔵教の位に約して後の三教を格る (542c16)
- 3.4211 通教を格る (542c18)
- 3.4212 別教を格る (542c28)
- 3.4213 円教を格る (543a3)
- 3.422 通教の位を用て後の二教の位を格る (543a8)
- 3.4221 別教を格る (543a9)
- 3.4222 円教を格る (543a13)
- 3.423 別教もて円教の位を格る (543a17)
- 3.43 興廃を明かす (543b18)
- 3.431 権經に興有り廢有るを明かす (543b19)
- 3.4311 三蔵教の興廢を明かす (543b20)
- 3.4312 通教の興廢を明かす (543c7)
- 3.4313 別教の興廢を明かす (543c18)
- 3.432 実教は興有りて廢せざるを明かす (543c29)

【翻訳】

維摩經玄疏卷第四

天台山修禪寺沙門智顓撰

3.34 円教に位を明かすに約して淨無垢稱の義を釈す

^{540b} 第四に円教に位を明かすに約して淨無垢稱の義を釈すとは、此の教は、因縁即一実諦、不思議解脱、虚空仏性、大般涅槃、諸仏の法界の理を詮ず。若し

菩薩は此の教門を稟けば、理は深に非ず浅に非ずと雖も、証する者には、深淺の位無きにあらず。今、此の教の入道を明かすに、亦た具さに四門有れども、諸の大乗経は多く非空非有門を用うるなり。正しく此の経の諸菩薩、各おの不二法門に入るを説くに、一往同じと雖も、細検するに四門の別無きにあらざるが如し。而も多く非空非有門を用て、不思議解脱に入るなり。此の義は下に在れば、自ら当に見る可し。

これに就いて、略して三意と為す。一に別・円の両教に位を明かすこと不同なるを簡ぶ。二に正しく此の教に位を辨ずるを明かす。三に円教の位に約して、淨無垢称の義を釈す。

3.341 別・円の両教に位を明かすこと不同なるを簡ぶ

第一に別・円の両教に位を明かすこと不同なるを簡ぶとは、円教は既に円理を詮ずれば、略して円の義に八有りて、八別に異なるを明かす。已に前に説くが如し。今、但だ無明を断じて位を判ずるに高下不同なるに約するなり。

若し別教もて明かさば、三十心¹に界内の結を断じて、即ち界外の無明を伏し、廻向の後心に至りて真智を發し、仏性中道の理を見て、一品の無明を断ずるを、初地に登ると名づく。乃至、十品の無明を断ずるを、名づけて十地と為す。等覚の後心に無明を断ずること方に尽く。妙覺は累外に蕭然たり。此れは前に分別するが如し。

円教^{540c}に明かす所の若きは、初めの仮名の發心従り、即ち一心三觀もて隨喜の心を修し、十信の位に入る。界内の惑を断じ尽くし、即ち界外の無明を伏す。十住の初心は、円眞の智慧を發し、無明の初品を断ず。此れ従り四十心に皆な無明を断じ、等覚の後心に至りて方に尽くす。妙覺の極地は、累外に蕭然たり。究竟の菩提、無上の大涅槃と名づくるなり。此れは則ち位を判ずるに、高下殊別す。故に別・円の両教に位を明かすこと同じからざるなり。

1 三十心 十住、十行、十廻向のこと。

3.342 正しく円教に位を辨ずるを明かす

第二に正しく円教の位を明かすとは、亦た還つて七位に約して五十二位の不同を明かす。一に十信、二に十住、三に十行、四に十廻向、五に十地、六に等覺地、七に妙覺地なり。但だ解する者は同じからず。有る師の言わく、「円教の頓悟は、一悟せば、即ち是れ仏にして、復た位別の殊なり無し」と。十地の位を説くは、鈍根人の為めなるのみ。『思益經』に云うが如し、「此の如く学ぶ者は、即ち一地従り一地に至らず」²と。又た、有る師の解して言わく、「円教は既に是れ頓悟なれば、初心に一悟せば、即ち究竟して円極なり」と。而して四十二位有りとは、但だ是れ物を化す方便にして、浅深の名を立つるのみ。故に『楞伽經』に云わく、「初地は即ち二地、二地は即ち三地なり。寂滅真如に、何の次有るや」³と。又た、有る師の言わく、「円教は頓悟にして、十住に至れば、即ち是れ十地なり」と。而して十行・十廻向・十地有りと説くは、此れは是れ重説なり。意謂わく、此の諸の解釈は、悉ごとく是れ偏えに取る。但だ平等の法界は、尚お悟と不悟とを論ぜず。孰れか浅と深とを論ぜん。不悟なれども悟を論ずるは、不浅不深なれども浅深を論ずるなり。諸の大乗經に理を明かすこと究竟なるを尋ぬるに、『華嚴』・『大集』・『大品』・『法華』・『涅槃』を過ぐる事無し。法界は平等にして。無説無示なるを明かす。而も菩薩の位行は、終自に炳然たり。是を以て今還りて七位に約して、以て円教の菩薩の位を明かすなり。

3.3421 十信

一に十信とは、利根の若きは、頓に深妙の善根を悟る。一切衆生は即ち大涅槃にして、復た滅す可からず、一切衆生は悉ごとく菩提の相なりと説くを

2 『思益經』に云うが如し、「此の如く学ぶ者は、即ち一地従り一地に至らず」『思益梵天所問經』卷第一、分別品、「若人聞是諸法正性、勤行精進、是名如說修行、不従一地至一地」(T15, no. 586, p. 36, c6-7)を参照。

3 『楞伽經』に云わく、「十地為初地、初地為八地。九地為七地、七地為八地。二地為三地、四地為五地。三地為六地、寂滅有何次」(T16, no. 671, p. 555, c14-18)を参照。

聞いて、即ち大慈大悲を發し、無作の四実諦を縁じて、四弘誓願を起こす。是れ円教の發菩提心と名づく。信心とは、一切衆生は即ち是れ真性解脱なりと信じ、一体三宝・一心三觀を具足し、二諦・三諦の理を觀じ、通達無礙にして、隨喜心の五品弟子の因を成ずる是れなり。若し三昧、及び陀羅尼、六根清淨を得ば⁴、即ち是れ十信の位に入るなり。若し十信の成就することを得ば、即ち能く真諦の理を見、界内の見思を斷じ、亦た能く俗諦の理を見、十法界の法を分別するに、心に謬亂無く、相似の中道の解を生じ、界外の無明を伏す。故に『仁王經』に云わく、「十善の菩薩は大心を發して、長く三界苦輪の海と別かる」⁵と。『法華經』に意根の清淨を明かして云わく、「未だ菩薩の無漏の智慧を得ずと雖も、其の意根の清淨は此の如し」⁶と。

3.3422 十住

二に十住の位を明かすとは、即ち二意と為す。一に略して初發心住を釈す。二に類して九住に通ず。

3.34221 略して初發心住を釈す

一に正しく初發心住の位を釈すとは、言う所の發心住とは、三種の心發するが故に、發心住と名づく。三徳涅槃を、名づけて住と為すなり。云何んが名づけて三種心發すと為すや。一には縁因の善心發す。二には了因の慧心發す。

4 若し三昧、及び陀羅尼、六根清淨を得ば 『法華經』妙音菩薩品、「此娑婆世界無量菩薩、亦得是三昧及陀羅尼」(T09, no. 262, p. 56, b18-19)、同卷第六、常不輕菩薩品、「是比丘臨欲終時、於虛空中、具聞威音王仏先所說法華經二十千萬億偈、悉能受持、即得如上眼根清淨、耳鼻舌身意根清淨。得是六根清淨已、更增壽命二百萬億那由他歲、廣為人說是法華經」(同前, p. 51, a3-7)を参照。

5 『仁王經』に云わく、「十善の菩薩は大心を發して、長く三界苦輪の海と別かる」 『仁王般若波羅蜜經』卷第一、菩薩教化品、「十善菩薩發大心、長別三界苦輪海」(T08, no. 245, p. 827, b14)を参照。

6 『法華經』に意根の清淨を明かして云わく、「未だ菩薩の無漏の智慧を得ずと雖も、其の意根の清淨は此の如し」 『法華經』卷第六、法師功德品、「雖未得無漏智慧、而其意根、清淨如此」(T09, no. 262, p. 50, a26-27)を参照。

三には正因の理心発す。

一に縁因の善心発すとは、衆生は無量劫より来、所有る低頭、合掌、彈指、散華、發菩提心、慈悲、誓願、布施、持戒、忍辱、精進、禪定等の一切の善根は一時に開發し、一心に万行、諸波羅密を具足するなり。

二に了因の慧心発すとは、衆生は無量劫より来、大乘、乃至一の句・偈を聞き、受持、読、誦、解説、書写し、觀行修習し、所有る智慧は一時に開發して、真無漏を成ずるなり。

三に正因の理心発すとは、衆生は無始以来、仏性の真心は、常に無明の隱覆する所と為り、縁・了の両因の力もて無明の暗を破し、豁然として円かに顯わるるなり。

此の三種の心は開發するが故に、発心と名づく。住とは、三徳涅槃に住するなり。一に法身、二に般若、三に解脱なり。此の三は不縦不横なること、世の伊字の如きを、秘密⁷藏と名づく。真実心発するは、即ち是れ法身なり。了因心発するは、即ち是れ般若なり。縁因心発するは、即ち是れ解脱なり。三心若し発せば、世の伊字に同じく、仮名の行人は、不住の法を以て、此の三心に住す。即ち是れ三徳涅槃、秘密の藏に住す。故に初発心住と言うなり。若し三徳に住せば、即ち是れ不思議解脱に住す。即ち是れ大乘に住す。即ち是れ不住の法を以て般若に住す⁸。即ち是れ首楞嚴三昧に住し、心を修持すること、猶お虚空の如し。即ち是れ法性^{541b}に住す。即ち是れ実相に住す。即ち是れ如如に住す。即ち是れ如来藏に住す。即ち是れ中道第一義諦に住す。即ち是れ法界に住す。即ち是れ畢竟空に住す。即ち是れ大慈・大悲・十力・四無畏・十八不共法に住す。即ち是れ四無礙智・神通・四摂・諸波羅密・一切三昧・陀羅尼門に住す。要を挙げて之れを言わば、即ち是れ真・応二身、一切仏法に住するなり。故に『華嚴經』に云わく、「初発心の時、便ち正覚を成ず。諸

7 密 底本の「蜜」を文意によって改める。

8 即ち是れ不住の法を以て般若に住す 『大智度論』卷第十一、「仏告舍利弗、菩薩摩訶薩以不住法住般若波羅蜜中、以無所捨法具足檀波羅蜜、施者、受者及財物不可得故」(T25, no. 1509, p. 139, a24-26)を参照。

法の真実の性を了達す。所有る聞法は、他に由りて悟らず⁹と。是れ菩薩、十種の智力¹⁰を成就し、究竟して虚妄を離れ、染無きこと虚空の如し。清浄妙法身は湛然にして一切に応ず¹¹。当に知るべし、此れは即ち是れ真無漏を發して、無明の初品を斷ずるなり。即ち是れ此の經に一念に一切法を知るを明かす。即ち是れ道場に一切智を成就するが故なり。又た、即ち是れ此の經に不二法門に入りて、無生法忍を得るを明かすなり¹²。

3.34222 類して九住を釈す

二に類して九住を釈すとは、此の如く初住に三觀は現前し、無功用の心は、念念に法界の無量品の無明の称計す可からざるを斷ず。一往大分するに、略して十品の智・斷と為す。即ち是れ十住なり。故に『仁王經』に云わく、「入理の般若を、名づけて住と為す」¹³と。即ち是れ十番に進んで無漏の真明を發

9 『華嚴經』に云わく、「初發心の時、便ち正覺を成ず。諸法の真実の性を了達す。所有る聞法は、他に由りて悟らず」『六十卷華嚴經』卷第八、梵行品、「初發心時、便成正覺、知一切法真実之性、具足慧身、不由他悟」(T09, no. 278, p. 449, c14-15)を参照。

10 十種の智力 いわゆる仏の十力を指す。『六十卷華嚴經』卷第八、菩薩十住品、「此菩薩因初發心得十力分。何等為十。所謂是處非處智、業報垢淨智、諸根智、欲樂智、性智、一切至處道智、一切禪定解脫三昧正受垢淨起智、宿命無礙智、天眼無礙智、三世漏盡智、是為十」(T09, no. 278, p. 445, a7-11)、『維摩經略疏垂裕記』卷第七、「十種智力者暹云、彼經第十四卷初云、智首菩薩問文殊言、仏子菩薩云何得處非處智力、過未現在業報智力、根勝劣智力、種種界智力、種種解智力、一切至處道智力、禪解脫三昧染淨智力、宿住念智力、無障礙天眼智力、斷諸集智力」(T38, no. 1779, p. 805, b6-11)を参照。

11 究竟して虚妄を離れ、染無きこと虚空の如し。清浄妙法身は湛然にして一切に應ず『六十卷華嚴經』卷第九、初發心菩薩功德品、「諸仏妙色身 種種相莊嚴 究竟離虚妄 清浄真法身」(T09, no. 278, p. 458, a2-3)、同、「菩提心無量 清浄法界等 無著無所依 無染如虚空」(同前, p. 453, b29-c1)、同、「清浄妙法身 応現種種形……普應一切世 方便無不現」(同前, p. 454, c2-12)を参照。

12 此の經に不二法門に入りて、無生法忍を得るを明かすなり 『維摩經』卷中、入不二法門品、「説是入不二法門品時、於此衆中、五千菩薩皆入不二法門、得無生法忍」(T14, no. 475, p. 551, c25-26)を参照。

13 『仁王經』に云わく、「入理の般若を、名づけ住と為す」『仁王般若波羅蜜經』卷第

して、同じく中道・仏性・第一義諦の理に入る。不住の法を以て、浅き従り深きに至り、仏の三徳涅槃の理に住す。即ち是れ十品の智慧は、一切の仏法に住す。故に十住と名づく。

3.3423 十行

三に十行を明かすとは、即ち此の十住の真心、一心に一切行を具し、念念に自然に平等法界の海に進趣し流入し、十品の無明を破し、十品の智・断、一切の諸行・諸波羅蜜を証し、自然に増長して、自行・化他の功德を出生し、虚空法界と等し。故に十行と名づくるなり。

3.3424 十廻向

四に十廻向を明かすとは、一心の真明、解・行は念念に開発し、心心寂滅して、自然に平等法界の薩婆若海に廻入す。又た、進んで十品の無明を破し、十品の智・断を証す。故に十廻向と名づくるなり。

3.3425 十地

五に十地を明かすとは、無漏の真明は、無功用の道に入ること、猶お大地の能く一切の仏法を生ずるが如し。法界の衆生を荷負して、普く三世の仏地に入り、広大なること法界の如く、究竟なること虚空の如し¹⁴。又た、進んで

一、菩薩教化品、「入理般若名為住、住生德行名為地、初住一心足德行、於第一義而不動」(T08, no. 245, p. 827, b25-27) を参照。また、『法華玄義』卷第五上にも、「初住既爾、三觀現前、無功用心断法界無量品無明、不可称計。一往大分、略為十品智断、即是十住故。仁王云、入理般若名為住。即是十番進發無漏、同見中道仏性第一義理。以不住法、從浅至深、住仏三徳及一切仏法、故名十住位」(T33, no. 1716, p. 734, b8-13) と類似の文がある。

14 普く三世の仏地に入り、広大なること法界の如く、究竟なること虚空の如し
『六十卷華嚴經』卷第二十三、十地品、「金剛藏菩薩即從三昧起、告諸菩薩言、諸仏子、是諸菩薩願決定、無有過、不可壞、廣大如法界、究竟如虚空、遍覆一切十方諸仏世界衆生、為救度一切世間、為一切諸仏神力所護。何以故。諸菩薩摩訶薩入過去諸仏智地、亦入未來、現在諸仏智地」(T09, no. 278, p. 542, c19-24) を参照。

十品の無明を破し、進んで十品の智・断を証す。此れに約して已^{もつ}て十地を明かすなり^{541c}。

3.3426 等覺地

六に等覺地を明かすとは、無明の源を窮め、重玄門に入り、辺際智満ち、畢竟清浄にして、中道の山頂に登り、無明の父母と別る。猶お是れ後心の金剛無闕なるがごとし。即ち是れ有所断者と名づけ、有上士と名づくるなり¹⁵。

3.3427 妙覺地

七に妙覺地を明かすとは、究竟の解脱、無上の仏智なり。故に無所断者と言ひ、無上士と名づく。此れは即ち是れ究竟の後心、三徳の不縦不横の大涅槃なり。大涅槃を、諸仏の法界と名づく¹⁶。豎に深く横に闊く、能く二十五三昧を用て、普く衆生を化す。隠顕に十番もて物を利し、究竟周普す。譬えば大樹の根若し深極ならば、枝條も亦た大なるが如し。若し実相の智慧もて源を窮め性を尽くさば、化用の功は、則ち法界に弥満し、無方の大用は、究竟して円極なり。故に『大智論』に云わく、「智度の大道は、仏従り来り、智度の深海は、仏、底を窮むるなり」¹⁷と。『大品経』に云わく、「荼を過ぎて、字の説く可

15 即ち是れ有所断者と名づけ、有上士と名づくるなり 『南本涅槃経』卷第十六、梵行品、「云何無上士。上士者、名之為断。無所断者、名無上士。諸仏世尊無有煩惱、故無所断、是故号仏為無上士」(T12, no. 375, p. 711, c12-15)を参照。また、『法華玄義』卷第五上に、「等覺地者、觀達無始無明源底、辺際智満、畢竟清浄。断最後窮源微細無明、登中道山頂、与無明父母別、是名有所断者、名有上士也」(T33, no. 1716, p. 734, c9-12)と類似の文がある。

16 大涅槃を、諸仏の法界と名づく 『南本涅槃経』卷第四、四相品、「大涅槃者、即是諸仏如来法界」(T12, no. 375, p. 629, b15)を参照。

17 『大智論』に云わく、「智度の大道は、仏従り来り、智度の深海は、仏、底を窮むるなり」 『大智度論』卷第一、「智度大道仏従来、智度大海仏窮尽、智度相義仏無礙、稽首智度無等仏」(T25, no. 1509, p. 57, c11-13)を参照。

き無し」¹⁸と。『大涅槃經』に云わく、「不生不生不可説なり」¹⁹と。若し此れを作して位を辨ぜば、前の三十心より來、諸地は皆な是れ寂滅の真如、平等の法界、不思議にして、次位無きの位なり。

問うて曰う。此の如き円位は、何れの經論に出ずるや。

答えて曰う。『大涅槃經』に月愛三昧を明かさく、「初めの一日従り十五日に至りて、光明は漸漸に増長す。又た、十六日従り三十日に至りて、光明は漸漸に減尽す」と²⁰。月光漸漸に増長すとは、智徳の十五の摩訶般若の光明を譬うるなり。漸漸に減尽すとは、十五の断徳の無累解脱減尽するなり。十五種の智・断とは、三十心を三の智・断と為し、十地を十の智・断と為し、等覺を一の智・断と為し、妙覺を一の智・断と為す。合して十五の智・断と為す。故に初めの一日従り十五日に至るに、月を以て譬えと為すなり。月の体は、即ち法身を譬う。法身は是れ一なり。光明の漸増するは、般若の智徳の不生なれども生なるを譬う。光明の漸減するは、解脱の断徳の不減なれども減なるを譬う。故に『涅槃經』に明かさく、「初め従り諸子を秘密の蔵、三徳涅槃に安置し、然る後に我れも亦た当に此の秘密蔵の中に於いて、般涅槃すべし」²¹と。此の最後究竟の涅槃を、名づけて不生不生と為す。般若は畢竟する

18 『大品經』に云わく、「茶を過ぎて、字の説く可き無し」 『大品般若經』 卷第五、広乗品、「茶字門、入諸法辺竟處故不終不生、過茶無字可説」(T08, no. 223, p. 256, b10-11)を参照。

19 『大涅槃經』に云わく、「不生不生不可説なり」 『南本涅槃經』 卷第十九、光明遍照高貴徳王菩薩品、「仏言、善哉、善哉。善男子、不生不生不可説、生生亦不可説、生不生亦不可説、不生不生亦不可説、生亦不可説、不生亦不可説、有因縁故亦可得説」(T12, no. 375, p. 733, c9-12)を参照。

20 『大涅槃經』に月愛三昧を明かさく、「初めの一日従り十五日に至りて、光明は漸漸に増長す。又た、十六日従り三十日に至りて、光明は漸漸に減尽す」 『南本涅槃經』 卷第十八、梵行品、「大王、譬如月光、從初一日至十五日、形色光明漸漸増長。月愛三昧亦復如是、令初發心諸善根本漸漸増長、乃至具足大般涅槃。是故復名月愛三昧。大王、譬如月光從十六日至三十日、形色光明漸漸損減。月愛三昧亦復如是、光所照處、所有煩惱能令漸減。是故復名月愛三昧」(T12, no. 375, p. 724, b11-17)を参照。

21 『涅槃經』に明かさく、「初め従り諸子を秘密の蔵、三徳涅槃に安置し、然る後に我れも亦た当に此の秘密蔵の中に於いて、般涅槃すべし」 『南本涅槃經』 卷第二、哀歎

に不生不滅にして、更に惑として断ず可き無きなり。又た、『法華經』に、開示悟入を明かす²²。南岳師解して云わく、「即ち是れ円教の四十心なり」²³と。又た、『大品經』に、四十二字門を明かす。初めの阿字門にも亦た四十二字門を具し、後の茶字門にも亦た四十二字門を撰す²⁴。南岳師は、即ち是れ円教の四十二地の異名なりと解す²⁵。『仁王經』に明かさく、「三賢・十聖の忍中の行は、唯だ仏一人のみ能く源を尽くす」²⁶と。即ち是れ円通の位相を説くなり。『瓔珞經』に、「三賢の菩薩は、自然に薩婆若海に流入す」と云う²⁷は、即ち其の義なり。『華嚴經』に云わく、「初めの一地从り、即ち一切諸地の功德を具足す」²⁸

品、「我今当令一切衆生及我諸子四部之衆、悉皆安住秘密藏中。我亦復当安住是中、入於涅槃」(T12, no. 375, p. 616, b8-10)を参照。

22 『法華經』に、開示悟入を明かす 『法華經』卷第一、「諸仏世尊、欲令衆生開仏知見、使得清淨故、出現於世。欲示衆生仏之知見故、出現於世。欲令衆生悟仏知見故、出現於世。欲令衆生入仏知見道故、出現於世。舍利弗、是為諸仏以一大事因縁故出現於世」(T09, no. 262, p. 7, a23-28)を参照。

23 南岳師解して云わく、「即ち是れ円教の四十心なり」 出典未詳。「四十心」は、十住・十行・十廻向・十地を指す。

24 『大品經』に、四十二字門を明かす。初めの阿字門にも亦た四十二字門を具し、後の茶字門にも亦た四十二字門を撰す 『大品般若經』卷第二十四、四摂品、「当善学分別諸字、亦当善知一字乃至四十二字。一切語言皆入初字門、一切語言亦入第二字門、乃至第四十二字門、一切語言皆入其中。一字皆入四十二字、四十二字亦入一字」(T08, no. 223, p. 396, b21-25)を参照。

25 南岳師は、即ち是れ円教の四十二地の異名なりと解す 慧思に『四十二字門』の著作があったが、現存しない。ただし、宝地房証眞の『四十二字門略抄』は現存する。

26 『仁王經』に明かさく、「三賢・十聖の忍中の行は、唯だ仏一人のみ能く源を尽くす」 『仁王般若波羅蜜經』卷第一、菩薩教化品、「三賢十聖忍中行、唯仏一人能尽原、仏衆法海三宝藏、無量功德撰在中」(T08, no. 245, p. 827, b12-14)を参照。

27 『瓔珞經』に、「三賢の菩薩は、自然に薩婆若海に流入す」と云う 『菩薩瓔珞本業經』卷上、賢聖学観品、「二種法身变易受生、三觀現前常修其心入百法明門、所謂十信、一信十故百法明門、十三故煩惱畢竟不受、心心寂滅法流水中、自然流入薩婆若」(T24, no. 1485, p. 1014, c23-27)を参照。

28 『華嚴經』に云わく、「初めの一地从り、即ち一切諸地の功德を具足す」 『六十卷華嚴經』卷第二十五、十地品、「解脱月菩薩問金剛藏菩薩言、仏子、菩薩摩訶薩但七地具足助菩提法、一切諸地亦能具足。金剛藏言、仏子、菩薩摩訶薩於諸地中皆悉具足助菩

と。『大智度論』に云わく、「菩薩は初発心従り、涅槃を觀じ道を行じ、乃至、道場に坐す」²⁹と。此の如き等の經論に明かす所は、豈に備さに述ぶ可けんや。引証・解釈は、具さに『四教大本』³⁰に在り。

3.343 円教の位に約して、淨無垢称の義を釈す

第三に円教の位に約して、淨無垢称の義を釈すとは、維摩大士、若是し位は法身の補処に在らば、即ち是れ等覺、金剛無垢の位なり。智慧は將に円かならんこと、十四日の月の如し。無明は將に尽きんこと、二十九日の月の如し。故に『智度論』に云わく、「善賢・文殊も亦た十力・四無所畏有ること、十四日の月の如し。仏も亦た十力・四無所畏を具足すること、十五日の月の如きなり」³¹と。法性の理顯わるるが故に、名づけて淨と為す。無明惑の垢は將に

提法、遠行勝故、於此地撰、何以故。諸菩薩摩訶薩於七地中功行具足、入智慧神通道故。仏子、菩薩於初地發願緣一切仏法故、具足助菩提法。二地除心惡垢故、具足助菩提法。三地願轉增長得法明故、具足助菩提法。四地入道故、具足助菩提法。五地隨順行世間法故、具足助菩提法。六地入甚深法門故、具足助菩提法。此第七地起一切仏法故、具足助菩提法。何以故。菩薩摩訶薩於此地中、得諸智慧所行道、以是力故、第八地自然得成。仏子、譬如二世界、一定清淨、一定垢穢、是二中間、難可得過。欲過此界、當以神通及大願力。菩薩亦如是、行於雜道、難可得過。以大願力、大智慧力、大方便力故、爾乃得過」(T09, no. 278, p. 561, c9-27)、同卷第一、世間淨眼品、「同一法性、覺慧廣大、甚深智境、靡不明達、住於一地、普撰一切諸地功德、無上智願皆已成滿、具足如來深広密教、悉得一切仏所共法、皆同如來行地、德力、一切三昧海門皆得自在、於衆生海如応示現、隨其所行、善能建立」(同前, p. 395, b24-29)、同卷第十、明法品、「具足清淨甚深智慧、菩薩一切諸地功德、諸波羅蜜」(同前, p. 458, c28-29)を参照。

29 『大智度論』に云わく、「菩薩は初発心従り、涅槃を觀じ道を行じ、乃至、道場に坐す」『大智度論』卷第六十一、「從初發心行六波羅蜜、入菩薩位、得十地、乃至坐道場。是中菩薩自修福德。和合得仏道、乃至入無余涅槃。滅度後、舍利及遺法、皆是仏自身功德和合」(T25, no. 1509, p. 488, b21-24)を参照。

30 『四教大本』『大本四教義』を指す。

31 『智度論』に云わく、「善賢・文殊も亦た十力・四無所畏有ること、十四日の月の如し。仏も亦た十力・四無所畏を具足すること、十五日の月の如きなり」『大智度論』卷第二十九、「菩薩雖作仏身、不能遍滿十方世界。仏身者、普能遍滿無量世界、所可度者、皆現仏身。亦如十四日月、雖有光明、猶不如十五日」(T25, no. 1509, p. 273, b13-

尽きんが故に、無垢と称す。等覚の智慧は理に^{かな}称い、円明は機に称う。而して照らすが故に、浄無垢称と言うなり。是れ則ち位は妙覚に隣る。若し円心を論ぜば、乃至、十方の仏土に、十法界の身の八相成道を現ず。此の土に宜しく補処の形を見るべし。故に無動仏の所に居して、補処の菩薩と為り、忍界に來遊して、諸菩薩を誦す。皆な疾を問うに^た任えずと称するは、正しく円を以て偏を破すればなり。又た、入不二法門を説いて、独り黙然たるは、円教の内証の法門、説示す可からざるを表わすなり。

3.35 五味の譬えに約して四教の位を顕わす

第五に五味の譬えに約して、四教の位を顕わすとは、『大涅槃經』に五味の譬えの不同を明かして、以て四教の位を辨ずることの不同の相を成ずるなり。『經』に云わく、「凡夫は乳の如く、須陀洹は酪の如く、斯陀含は生酥の如く、阿那含は熟酥の如く、阿羅漢・辟支仏は醍醐の如し」³²と。此の譬えの意は、恐らくは是れ三蔵教に位を明かすを顕わすなり。『經』に又た云わく、「凡夫は乳の如く、声聞は酪の如く、辟支仏は生酥の如く、菩薩は熟酥の如く、仏は醍醐の如し」³³と。此の譬えの意は、恐らくは通教に位を明かすを顕わすなり。

16)、同卷第二十九、「復次、又如王子名鳩摩羅伽、仏為法王。菩薩入法正位、乃至十地故、悉名王子、皆任為仏。如文殊師利、十力、四無所畏等悉具仏事故、住鳩摩羅伽地、広度衆生」(同前, p. 275, b22-26)を参照。

32 『經』に云わく、「凡夫は乳の如く、須陀洹は酪の如く、斯陀含は生酥の如く、阿那含は熟酥の如く、阿羅漢・辟支仏は醍醐の如し」 厳密には一致しないが、『南本涅槃經』卷第三十二、迦葉菩薩品、「須陀洹人、斯陀含人斷少煩惱、仏性如乳。阿那含人、仏性如酪。阿羅漢人、猶如生酥。從辟支仏至十住菩薩、猶如熟酥。如來仏性猶如醍醐」(T12, no. 375, p. 818, c6-9)を参照。また、『摩訶止観』卷第三下、「今用涅槃五譬積成此意。第六云、凡夫如乳、須陀洹如酪、斯陀含如生酥、阿那含如熟酥、阿羅漢・辟支仏・仏如醍醐」(T46, no. 1911, p. 33, c22-25)を参照。

33 『經』に又た云わく、「凡夫は雑血の乳の如く、羅漢は清浄の乳の如く、辟支仏は酪の如く、菩薩は生・熟酥の如く、仏は醍醐の如し」 『南本涅槃經』卷第九、菩薩品、「善男子、声聞如乳、縁覚如酪、菩薩之人如生熟酥、諸仏世尊猶如醍醐。以是義故、大涅槃中説四種性而有差別」(T12, no. 375, p. 664, b18-21)を参照。

『經』に又た云わく、「凡夫は^{542b}雜血の乳の如く、羅漢は清淨の乳の如く、辟支仏は酪の如く、菩薩は生・熟酥の如く、仏は醍醐の如し」³⁴と。此の譬えの意は、恐らくは別教に位を明かすを顕わすなり。『經』に又た云わく、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食さば、即ち醍醐を得」³⁵と。忍辱草とは、八聖道を論え、乳は十二部經を論う³⁶。随いて能く八聖道を修する者有らば、即ち仏性を見て、大涅槃に住す。此れは即ち円教の菩薩、初發心従り、即ち仏知見を開き、仏性を見て、大涅槃に住することを譬うるなり。『涅槃經』に、此の四譬³⁷を明かすは、四教に位を明かすを譬う。其の義は宛然たり。若し四教に位を明かすこと同じからざるを信ぜずば、云何んが此の五味、四種の譬えを消釈せんや。今、前の四教に位を明かすを用て、此の四譬に合す。一往、目視するが似^{こと}如^たし。祇^た自^ただ^た聖^た人の^た密^た意^たは^た知^たり^た難^たし。何ぞ定執す可けん。又た、『涅槃經』に云わく、「譬えば人有りて毒を乳に置き、乃至、醍醐も亦た能く

34 『經』に又た云わく、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食さば、即ち醍醐を得」『南本涅槃經』卷第三十二、迦葉菩薩品、「善男子、一切無明煩惱等結悉是仏性。何以故。仏性因故。從無明行及諸煩惱得善五陰、是名仏性。從善五陰乃至獲得阿耨多羅三藐三菩提。是故、我於經中先說衆生仏性如雜血乳、血者即是無明行等一切煩惱、乳者即是善五陰也。是故、我說從諸煩惱及善五陰得阿耨多羅三藐三菩提。如衆生身皆從精血而得成就、仏性亦爾。須陀洹人、斯陀含人斷少煩惱、仏性如乳。阿那含人、仏性如酪。阿羅漢人、猶如生酥。從辟支仏至十住菩薩、猶如熟酥。如來仏性猶如醍醐」(同前, p. 818, b27-c9)を参照。

35 『經』に又た云わく、「雪山に草有り、名づけて忍辱と曰う。牛は若し食さば、即ち醍醐を得」『南本涅槃經』卷第二十五、師子吼菩薩品、「善男子、雪山有草、名為忍辱。牛若食者、則出醍醐。更有異草、牛若食者、則無醍醐」(同前, p. 770, b12-14)を参照。

36 乳は十二部經を論う 『南本涅槃經』卷第二十五、師子吼菩薩品、「更有異草、牛若食者、則無醍醐。雖無醍醐、不可說言雪山之中無忍辱草。仏性亦爾。雪山者、名為如來。忍辱草者、名大涅槃。異草者、十二部經」(同前, p. 770, b14-17)を参照。

37 四譬 直前の『涅槃經』の四つの引用文(前注28-31を参照)に見られる四つの譬喩。

38 密 底本の「蜜」を宋本によって改める。

人を殺すが如し³⁹と。此の譬えは、応に両用を得べし。若し経教の五⁴⁰味に義を明かすに対せば、処々に皆な仏性を見て涅槃に入ることを得るなり。此れは即ち是れ不定の教門なり。事は下に在りて釈す。若し是れに約して殺人の義を明かさば、四位・五味の根縁は不定にして、其の大乗の機に随いて発す。即ち皆な如来の滅度を以て之れを滅度す⁴¹。故に殺人の義に同じきなり。

3.4 権実を明かす

第四に権実を明かすとは、此れに就いて即ち三意と為す。一に略して権実を明かし、二に位を格^{はか}り、三に興廢を明かす。

3.4.1 略して権実を明かす

第一に権実を明かすとは、権は是れ暫く用うるの名なり。実は永く施すを以て義と為す。方便波羅蜜は、情に随いて近益するが故に、名づけて権と為し、智波羅蜜は、理に称いて究竟するが故に、名づけて実と為すなり。是れ則ち三教は暫く物情に赴くが故に、名づけて権と為し、円教は究竟して物を利するが故に、名づけて実と為す。権実を分別するに、応に四義を須うべし。一に一切は非権非実なるを明かし、二に一切は皆な権なるを明かし、三に一切は皆な実なるを明かし、四に一切は権有り実有るを明かす。

39 『涅槃經』に云く、「譬えば人有りて毒を乳に置き、乃至、醍醐も亦た能く人を殺すが如し」『南本涅槃經』卷第二十七、師子吼菩薩品、「譬如有人置毒乳中、乃至醍醐皆悉有毒。乳不名酪、酪不名乳、乃至醍醐亦復如是。名字雖變、毒性不失、遍五味中皆悉如是。若服醍醐亦能殺人、實不置毒於醍醐中。衆生仏性亦復如是、雖處五道受別異身、而是仏性常一無變」(T12, no. 375, p. 784, c9-14)を参照。

40 五 底本の「六」を、文意と『四教義』卷第十二、「若対経教五味明義、処処皆得見仏性」(T46, no. 1929, p. 765, c22-23)によって改める。

41 即ち皆な如来の滅度を以て之れを滅度す 『法華經』譬喻品、「我有無量無辺智慧、力、無畏等諸仏法藏、是諸衆生皆是我子、等与大乘、不令人独得滅度、皆以如来滅度而滅度之」(T09, no. 262, p. 13, c5-8)を参照。

3.411 一切は非権非実なるを明かす

一に一切は非権非実なるを明かすとは、若し四不可説の無説を論ぜば、則ち四教の分かつ可き無し。三教無ければ、即ち権に非ず、円教無ければ、則ち実に非ず。是れ則ち一切の仏法は皆な非権非実なり。

3.412 一切は皆な権なるを明かす

二に一切は皆な権なるを明かすとは、若し四不可説なるも、因縁有れば而も説くを論ぜば、是れ則ち四教は皆な是れ権巧に物を化するなり。故に仏の言わく、「我れ道場に坐する時、一法の実なるも得ず。空拳もて小児を誑して、以て一切を度するなり」^{542c たぶらか}42と。

3.413 一切は皆な実なるを明かす

三に一切は皆な実なるを明かすとは、説くこと無くして而も説く。説けば必ず機に応ず。縁に赴くの益は、其の義皆な実なり。是の故に四教は皆な実と名づくるなり。故に『智度論』に云わく、「世界・対治・為人有るが故に実なり。第一義有るが故に実なり」⁴³と。此れは即ち皆な実にして虚ならざるの義なり。

3.414 一切は権有り実有るを明かす

四に一切に権有り実有るを明かすとは、仏法を至論すれば、権に非ず実に非ざれども、而も能く権、能く実なり。四不可説は、則ち権実の而も分かつ可き無し。故に非権非実と言う。説かずして而も説く。三教は即ち是れ権なり。円教は即ち是れ実なり。

但だ一家に権実を明かすに、三種の義有り。一に化他の権実、二に自行・

42 仏の言わく、「我れ道場に坐する時、一法の実なるも得ず。空拳もて小児を誑して、以て一切を度するなり」『大智度論』卷第二十、「我坐道場時、智慧不可得、空拳誑小兒、以度於一切」(T25, no. 1509, p. 211, a4-6)を参照。

43 『智度論』に云わく、「世界・対治・為人有るが故に実なり。第一義有るが故に実なり」『大智度論』卷第一、「仏法中、有以世界悉檀故実、有以各各為人悉檀故実、有以対治悉檀故実、有以第一義悉檀故実」(同前, p. 59, b22-24)を参照。

化他の権実、三に自行の権実なり。若是し化他の権実ならば、前の三教は但だ是れ権なるのみに非ず。此の権の中に就いて、亦た各おの権実を説くなり。若し自行・化他の権実を明かさば、即ち是れ前の三教は並びに是れ権の用なり。円教に明かす所は一向是れ実なり。若し自行の権実を論ぜば、即ち円教の位に就いて辨ず。中道を照らすを實と為し、双べて二諦を照らすを権と為すなり。

3.42 位を格るを明かす

第二に位を格るを明かすとは、即ち三意と為す。一に三蔵教の位に約して、後の三教を格る。二に通教の位に約して、後の二教を格る。三に別教の位に約して、後の円教を格る。

3.421 三蔵教の位に約して後の三教を格る

一に三蔵教の位に約して、後の三教を格るとは、即ち三意と為す。一に三蔵教の位を明かして通教を格る。二に三蔵教の位に約して別教を格る。三に三蔵教の位を明かして円教を格る。

3.4211 通教を格る

一に三蔵教の位を明かして通教を格るとは、若し声聞・縁覚を論ぜば、通教に二乗を明かすと殊ならず。若し大乘に位を明かすに約さば、此れは則ち大いに殊別と為す。

所以は何ん。三蔵教に三阿僧祇劫に修行し、乃ち補処即ち是れ淨無垢の位に至るを明かす。止だ通教の柔順忍・性地忍・法中忍と齊しきことを得。若是し三蔵の仏は但だ通教の仏地に齊しきことを得ば、正習は俱に尽き、以て相い齊しきなり。傍ら三蔵の仏を論ずるに、是れ析法の智を拙と為し、通教の仏は是れ体法なるが故に巧と為す。『智度論』に云うが如し、「阿羅漢地は

声聞經の中に於いて、之れを名づけて仏と為す。但⁴⁴だ二種の涅槃を得るのみ⁴⁵と。今謂わく、皆な正使を除けば、已辨⁴⁶地と齊し。若し二諦満ち、習氣尽くるを取らば、羅漢は豈に仏と齊しきことを得んや⁴⁷。

3.4212 別教を格る

二に三蔵教の位を用て別教の位を格るを明かすとは、三蔵は一生補処の淨無垢の位を明かす。別教を格るに、^{543a}鉄輪十信の第十の願心と齊し。仏地は但だ別教の初地と齊しきなり。此れは乃ち正意なり。傍ら論ずるに、通教に類して知る可きなり。

3.4213 円教を格る

三に三蔵教もて円教の位を格るを明かすとは、三蔵の補処の淨無垢稱の位は、但だ円教の五品弟子の第五品と齊し。仏地は十住の初發心住と齊し。正義は此の如し。傍ら論ずるに、互いに優劣有り。三蔵の仏は正習俱に尽く。此れは乃ち齊しと為す。明らかに仏性を見て無明を断ずることをせざるは、此れを劣と為すなり。故に『華嚴經』は初發心住の菩薩を歎じて云わく、「初發心は已に牟尼を過ぐるなり」⁴⁸と。

3.422 通教の位を用て後の二教の位を格る

二に通教の位を用て後の二教の位を格るを明かす。即ち二と為す。一に別

44 但 底本の「俱」を、文意と『四教義』(後注47を参照)によって改める。

45 『智度論』に云うが如し、「阿羅漢地は声聞經の中に於いて、之れを名づけて仏と為す。俱に二種の涅槃を得」 出典未詳。

46 辨 底本の「辨」を、文意によって改める。

47 若し二諦の満を取り、習氣尽かば、羅漢は豈に仏と齊しきことを得んや 『四教義』卷第十二、「問曰、智度論云、阿羅漢地於声聞經中、名之為仏。但得二種涅槃。答曰、今謂皆除正使。已辨(→辨)地齊。若取二諦満正習尽、二仏齊也」(T46, no. 1929, p. 766, b18-21)を参照。

48 『華嚴經』は初發心住の菩薩を歎じて云わく、「初發心は已に牟尼を過ぐるなり」『六十卷華嚴經』に「初發心」は頻出するが、出典未詳。

教を格り、二に円教を格る。

3.4221 別教を格る

一に別教の位を格るを明かすとは、通教に補処の淨無垢の位を明かす。往きて格るに、但だ別教の十行と齊しきのみ。通教の仏果は、但だ十地の初歡喜地と齊し。正義は此の如し。傍ら論ずるに、劣ること有る者は、相似の中道智⁴⁹もて無明を伏すること無きなり。

3.4222 円教を格る

二に通教の位もて円教を格ることを明かすとは、若し通教に補処の淨無垢の位を明かさば、但だ円教の鉄輪の位十信⁵⁰の第十の願心と齊し。仏果は但だ初發心住と齊しと明かす。此れは是れ一往之れを格る。正しく優劣を論ずるに、初發心住は初發心に能く中道法身を顕わし、無明の一品を断ずるを以て勝と為すなり。

3.423 別教もて円教の位を格る

三に別教もて円教の位を格るを明かすとは、若し別教に法身、法雲⁵¹、一生補処の淨無垢稱を明かさば、但だ円教の十住の第十の灌頂住と齊し。仏地は十一品の無明を断ず。但だ十行の初歡喜行と齊し。若し『仁王經』の十地を開いて三十生と為すに依らば⁵²、是れ則ち無垢は法界無量の迴向の位と齊し。仏

49 相似の中道智 『法華玄義』卷第三上、「六根淨位獲相似中道智」(T33, no. 1716, p. 709, a23) を参照。

50 円教の鉄輪の位十信 『法華玄義』卷第五上、「纓珞云、一信有十、十信有百。百法為一切法之根本也。是名円教鉄輪十信位、即是六根清淨、円教似解、燻、頂、忍、世第一法」(T33, no. 1716, p. 733, c25-27) を参照。

51 法雲 別教の十地のなかの第十法雲地を指す。

52 若し『仁王經』に依りて十地を開いて三十生と為さば 『仁王般若波羅蜜經』卷上、觀空品、「十地三十生空故、始生住生終生不可得、地地中三生空故、亦非薩婆若、非摩訶衍空故」(T08, no. 245, p. 826, a29-b2) を参照。

地は十地の初歡喜地と齊し。是れ則ち別教に一生補處を明かして、円教の位に望む。若し前積に義を以て往推するに依らば、猶お三十一品の無明有り。若し後に『仁王經』を引くに依らば、即ち猶お十一品の無明有り。是れ則ち別・円の法身の補處は、通じて位に約すと雖も、無垢稱の義は懸かに殊なり。豈に一概して維摩詰の名を積することを得んや。

問うて曰う。至道を尋ぬるに、是れ一なり。若し前の方便の三教に明かす所を格らば、補處と仏果は遂に伝爾として懸かに殊なり。此の意は解し難し。

答えて曰う。二義もて往積す。一に有教有人、二に有教無人なり。若是し三教^{543b}の方便の説、因中に教を稟くるの者ならば、即ち並びに有教有人なり。仏果、補處、及び上位の菩薩は、能く三教を説く。此れは並びに有教無人なり。所以は何ん。稟くる所の三教の行人は、教に因りて各おの其の利を獲。故に有教有人なり。能説の教主は示現して三教の仏と為る。菩薩は物をして果を慕い因を行ぜしむ。因行は既に成ずれば、則ち復た化主無し。斯の如く乃ち縁感ずれば便ち応じ、縁謝すれば便ち息む。空拳もて小兒を誑し、引將いて家に還らしむ。手の内に実に物無きなり。三教の化主も亦た皆な是の如し。若是し円教は有教有人ならば、因中に教を稟け、乃至、法雲は有教有人なり。四十一品の無明を斷ずる法身の補處は、此れは實にして虚ならず。妙覺の法身は無説の説にして、即ち是れ果上の有教有人なり。有教無人は、之れを目標^なづけて權と為す。有教有人は、之れを名づけて實と為す。

問うて曰う。若し爾らば、四教に果を明かすに、權實を分つ可し。四教の因地は、皆な有教有人なり。何ぞ其の權實を分つことを得ん。

答えて曰う。今、三教の人を明かして、名づけて權人と為す。円教を稟くるの人は、則ち人教俱に實なり。故に四教に因を明かすに、權實を分つなり。

問うて曰う。三教の因は既に權人を立つれば、三教の果は何の意ぞ權人を辨ずることを得ざるや。

答えて曰う。三教の行人は、円人と成る可し。三教の仏、因を修して円仏と作ること有ること無し。故に類に非ざるなり。

3.43 興廢を明かす

第三に興廢を明かすとは、即ち二意と為す。一に權教に興有り廢有り。二に實教に興有れども廢さず。

3.431 權經に興有り廢有るを明かす

一に權教に興廢有るを明かすとは、即ち三意と為す。

3.4311 三藏教の興廢を明かす

一に三藏教の機縁起きえんこれば則ち興り、機謝すれば則ち廢す。言う所の機とは、発す可きの義、之れを名づけて機と為す。前縁に小の樂欲有りて起こす可く、小善は生ず可く、小惡は治す可く、偏眞の解は発す可し。故に須らく四悉檀を用うべし。声聞經の中に於いて、因縁生滅の四諦・十二因縁・六度の教を説いて、三乗の道を開く。聞けば則ち機に稱い、樂欲の心は起こり、善を生じ、惡を斷ず。若是し二乗は眞無漏を發せば、有余涅槃を証す。若是し菩薩は六度もて心を調べ、伏忍・柔順忍を得るなり。故に『法華經』に「小智は小法を樂い、自ら作仏を信ぜず。是の故に方便を以て分別して諸果を説く」と云うは⁵³、此の機縁と為す。三藏の伏結、補処の菩薩、淨無垢稱の義、^{543c}三十四心の仏果、有余涅槃に住するの仏無しと雖も、四悉檀もて此の教を起こすを欲せんが為めの故に、此の教の形声を示現して、機に赴いて物を度す。故に『法華經』に明かさく、「長者は即ち瓔珞を脱ぎ、弊垢の衣を著し、除糞の器を執り、畏るる所有るかたどに狀りて、諸の作人に語る」⁵⁴と。即ち是れ三藏教興るの義なり。

53 『法華經』に「小智は小法を樂い、自ら作仏を信ぜず。是の故に方便を以て分別して諸果を説く」と云うは 『法華經』方便品、「智樂小法、不自信作仏、是故以方便、分別說諸果」(T09, no. 262, p. 9, c25-27)を参照。

54 『法華經』に明かさく、「長者は即ち瓔珞を脱ぎ、弊垢衣を著し、除糞の器を執り、畏るる所有るに狀りて、諸の作人に語る」『法華經』信解品、「即脱瓔珞、細軟上服、嚴飾之具、更著弊垢膩之衣、塵土全身、右手執持除糞之器、狀有所畏、語諸作人」(同前, p. 17, a15-17)を参照。

癡とは、此の小欲は將に歇⁵⁵きんとし、小善は已に成じ、事悪は既に除き、真解は已に発す。是れ則ち四縁⁵⁵は俱に息めば、則ち三蔵の所説の教、能説の人は、俱に癡⁵⁶するなり。

3.4312 通教の興廢を明かす

二に通教の興癡⁵⁷を明かすとは、興は則ち機興り、癡は則ち機癡す。機興りて教興る。教興るとは、無生の四諦の樂欲は將に起らんとし、体仮入空の善は生ず可く、理に迷う見思は斷ず可く、即眞の解は発す可し。故に須らく四悉檀を用て、無生の四諦を説くべし。通教の三乗は、聞けば則ち樂欲の心は起りて、善を生じ、惡を斷ず。三乗は同じく即眞無漏の慧を發し、第一義を見る。二乗は有余涅槃に住し、菩薩は則ち空に滞らず。慈悲もて仮に入り物を化し、誓いて仏果を求む。此の縁に赴いて、通教の斷結侵習、上地の補處の菩薩、淨無垢稱の位、一念相應の斷習、仏果の位の有余涅槃無しと雖も、教を起こさんが為めに、此の三乗の根縁に赴いて、此の教の形声を示現す。悉檀もて縁に赴き物に返す。故に名づけて興と為す。

癡とは、四機は既に息み、縁謝すれば則ち癡す。所説の通教、能説の人は、俱に癡するなり。

3.4313 別教の興廢を明かす

三に別教の興癡を明かすとは、興は則ち機興り教興る。無量四諦の樂欲は將に起こらんとす。從空入仮の善根は生ず可く、無量恒沙の煩惱の別惑と見思は治す可く、中道第一義諦の眞解は發す可し。故に四悉檀を用て、無量の四諦を説き、別教の菩薩に赴く。聞けば則ち樂欲の心起こり、界外の善を生

55 四縁 四悉檀を受ける四種の機縁。後に出る「四機」と同じ。

56 癡 底本の「癡」を、文意と『四教義』によって改める。『四教義』卷第十二、「是則四縁俱息、則三蔵所説之教、能説之人俱廢也」(T46, no. 1929, p. 767, b1-2)を参照。

57 癡 底本の「癡」を、文意と『四教義』によって改める。『四教義』卷第十二、「二明通教興廢者、興則機興、廢則機廢」(同前, p. 767, b2-3)を参照。

じ、界外の悪を断じ、中道の相似の無漏、及び真の無漏を発し、常住の仏果、大涅槃を求む。此の機縁に赴かんがために、別教に十品の無明を断じ、法身の補処の菩薩、十一品の無明を断じ、仏果を究竟すること無しと雖も、此の教の形声を示現す。悉檀を用て、物の機縁に赴き、無量の四聖諦を説く。故に別教興ると名づく。

癡とは、四機既に息み、縁謝すれば則ち癡す。所説の別教、能説の別教、明かす所の上地の補処の菩薩・仏果は、俱に癡するなり。

3.432 実教は興有りて癡せざるを明かす

二に実教の興りて癡^{544a}せざるを明かすとは、即ち是れ円教は但だ興るのみにして癡さざるなり。『華嚴』、『方等』、『法華』、『涅槃』に説く所の円教の若きは、円機に赴く。樂欲して、善を生じ、悪を断じ、中道第一義諦を見る。是れ則ち初発心従り無垢地に至るまで、四の根縁に赴き、常に此の教を説き、等覺・仏に至る。故に名づけて興と為す。故に三十二の菩薩、文殊師利等は、皆な入不二法門を説く。即ち是れ教興るの意なり。若し妙覺を証し、無師自悟せば、法として欲す可き無く、善として生ず可き無く、惡として断ず可き無く、更に深理の見る可き無し。言辞の相は寂滅し、本自と興無し。故に癡無きなり。癡無きも、亦た癡を論ずることを得とは、四悉檀の機尽くれば、則ち教息む。故に癡と名づくるなり。故に『大品經』に云わく、「茶を過ぎて、字として説く可き無し」⁵⁸と。『涅槃經』に云わく、「不生不生不可説なるが故なり」⁵⁹と。故に浄名は黙然として口を杜ぎ、復た言を以て無言の理を言わず。文殊は称歎して、絶言を表するなり⁶⁰。是れ則ち因に在りては有人有教なり。果に至り

58 『大品經』に云わく、「茶を過ぎて、字として説く可き無し」『大品般若經』卷第五、広乗品、「茶字門、入諸法辺竟処故不終不生、過茶無字可説。何以故。更無字故。諸字無礙、無名亦滅、不可説不可示、不可見不可書」(T08, no. 223, p. 256, b10-13)を参照。

59 前注19を参照。

60 浄名は黙然として口を杜ぎ、復た言を以て無言の理を言わず。文殊は称歎して、絶言を表するなり「杜口」は、口をふさぐこと、沈黙すること。『維摩經』入不二法門品における維摩詰の沈黙に基づく表現。「絶言」は、言葉で表現できないことを意味する。

ては、即ち教癡し人存す。三徳涅槃は湛然として清浄なり。豈に前の三教の補処の菩薩、菩提、仏果は、皆な有教無人なるに同じからん。教癡すれば、人も亦た随いて癡す。権実の意は、此⁶¹に顕わるるなり。

61 此 底本の「在」を宋本によって改める。